



岡本かの子全集

第十一卷

岡本かの子全集 第十一卷

昭和五十一年七月二十五日初版第一刷發行

著 者 岡本かの子

發行者 高橋直良

發行所 冬樹社

東京都千代田區神田神保町二一八

電話東京二六四—〇三四六

振替東京七七五七

印刷所 株式會社太平洋社

製本所 有限會社三和製本所

製函所 株式會社光陽紙器製作所

本文用紙抄造 王子製紙春日井工場

表紙用クロス 日本クロス株式會社

裝 畫 岡本太郎

裝 幀 栃折久美子

第十一卷 目次

見在西洋

海……………	三
洋上元旦の思ひ出……………	六
見在西洋……………	九
續見在西洋……………	一六
續々見在西洋……………	一九
異國春色抄……………	二三
橋……………	二五
毛皮の難……………	二七
歐洲百貨店印象記……………	三

歐洲女性寸見	壹
伯林一話	貳
ベルリンの秋	参
オペラの辻	四
食魔 ^{グウルメ} に贈る	五
ロンドンの秋	六
或日のマクドナルド	七
歸朝間もなく	八
世界に摘む花	
佛蘭西篇	
巴里のキャフェ	九
巴里の唄うたひ	一〇
街頭	一一
賣春婦リゼット	一二

雪……………	七
オペラの歸途……………	一〇
門　　番……………	一五
マダム・マレイ……………	一九
巴里の秋……………	二三
異國食餌抄……………	二五
フランスの農民……………	二〇
女性文人のふらんす繪評……………	二三
巴里の自體……………	二七
フランスの政黨……………	二五
ゾーメ大統領選舉の當日……………	二五
ブリアン歸る……………	二六
英　國　篇	
商　業　街……………	二六

テームズ河……………	一六
ピカデリーを中心とした・劇・文學談……………	二六
バットクラス……………	三四
英國老嬢物語……………	三三
イギリス婦人の職業……………	三〇
大英の議事堂……………	三三
英國のスポーツ……………	三四
ミス・マッシュウの新職業……………	三六
午後五時の戀人……………	三〇
社會人としてのイギリス人……………	三六
英國メーデーの記……………	三九
シエクスピア斷觀……………	三四
愛蘭へ行く……………	三六
ダブリンの追憶より……………	二六

グレゴリー夫人訪問記……………三二

獨逸その他

雪の日……………三九

ワイプ・ヘイム・ベルリン
伯林の降誕祭……………三九

伯林の落葉……………三〇

國境の花束……………三六

夏Ⅱ 巴里、伯林、倫敦……………三〇

アメリカの禁酒法……………三五

旅とガストロノム……………三七

外國の思ひ出

歐洲土産話……………三七

ロンドンの春……………三三

フランスの田舎……………三三

巴里郊外の旅……………三七

商業と青年と夏など	三〇
巴里の食事	三三
海と山との思ひ出	三四
外國の魚	三九
田園の青年子女に語る	三三
外國に咲く花	三七
アイルランドの田舎	五一
西歐紀行拾遺	

ダグラスとメリーの初印象	五四
ダグラスとピツクフォードに會見	五五
フランスとドイツとイギリスと	五六
私の空手還郷	五七
英佛の女中さん氣質	五七
フランス南海岸	五九

あちらでした正月の思ひ出……………	三六二
レヴユウ紙上舞臺……………	三六五
マロニエの花……………	三〇二
シャンゼリゼの奥様……………	三〇四
不意打ち會……………	三〇六
アイルランドの一日……………	三〇七
晩秋初冬のベルリン……………	二一〇
解題・校訂……………	二二三

隨
筆
1



見 在 西 洋

海

私は嘗て、海は涯しない渺茫たるものと考へてゐた。行つても行つても盡きない廣大なものと考へてゐた。自由奔放でしかも悠久なるものこそ大洋だと考へてゐた。それは嘗ての私の幼稚な考へであつた。今もさう考へられぬ事はないが、強ひてさう考へる私の心の何處かにこれを肯ぜぬ氣持が頭を擡げて來る。昭和四年の秋、私の乗る歐洲航路の日本郵船は愈々日本の海をば玄海の荒浪を最後に離れてしまつた。支那海であつた。彈んだ氣持に身が引き締まるやうであつた。刮目して大海の涯を望んだ。然し眺められた海は、ほんの少し向うに見える水平線迄しか認められなかつた。その先は崖になつてゐるとしか私にはどうしても

思はれぬ。船は十五海里の速力で進んで行くが、私の見得る海面は、ほんの船の周りの水だけ、その内に一日半の時間が経つて上海に船は来てしまつた。上海を出た我等の船は、小さな島々に區切られる窮屈な南支那海へ入つてゐた。私共はこの南支那海で恐るべき話を聞いた。此處から先は海賊の勢力範圍だと。周邊に散在する小島こそ彼等の餌を待つ屈強の隠れ場所であり彼等の活躍は常に此處に限つて起る濃霧を利用して實に慘酷を極めると。この船員達の話に私は意外の感に打たれた。倭寇のゐたずと昔なら知らず、この文明の世の中に、しかも科學の粹を集めて建造された大汽船が、小つぽけな海賊船にめちやめちやにされる危険があるなどといふ船員の話は、私はどうしても信じられなかつた。が、間もなく香港に着くといふので未明から起きて騒いでゐた私達は、不意に異様な汽笛が自分達の船から鳴り響いたのに驚かされた。牛が締め付けられて唸るやうな音でした。腸に響く不快な振動を持つ音である。船は速力をゆるめた。濃霧が湧き起つたのだ。遂に停船した。船員は他船との衝突を恐れ、海賊の襲來を氣にした。やがて葬式の悵歌のやうなドラが鳴る、しきりと。汽笛が更に続く。一時間、二時間、五時間、霧はいつまで経つても晴れぬ。不安は一刻も去らぬ。私は海の不自由をつく／＼感じて呪はしかつた。

九時間後、やつと霧は晴れた。たどり着いた香港で船員達が差し示したものは、先刻の霧で停船中、海賊に油をかけて焼かれた英國汽船の残骸であつた。私は初めて海峽の恐ろしさを知つた。

香港の裏方の淺水灣は私が想像してゐた西洋風景を如實に見せて呉れた。人工の巧みと自然の美との完全の調和であつた。私共同船の日本人、スペイン人、ドイツ人達は始めて朗らかに笑ひさざめいた。私は墨繪に畫かれた山陰風景のやうな島や入江や、山々を眺めて樂しかつた。

歸船した後も、尙、残り惜しさうに香港の灣内に浮かぶ小島を眺めてゐた。突然私の後に立ちすくんでゐた獨逸人が素晴らしく精巧で重い雙眼鏡を私の前へ差し出した。向うの小島の頂を見よと指さす。私は他國

人の精巧な器械を受け取つて一寸たぢろいだが、素直に勧めに従つた。眼の前に大きく映し出された島の頂は峨峨たる巖石であつた。その巖石の凹みに數臺の大砲が私に向つてゐる。私は愕いて後の獨逸人を顧みた。彼は今度は水平に人差指を延ばして海面の船を見よといふ。私は又も素直に其方を覗いた。其處に自分の乗る汽船とは異つた船を見た。黒い鋼鐵の船である。大砲を向けてゐる。私は益々驚いて訊いた。獨逸人は科學的に明確に答へた。砲艦七隻、驅逐艦一隻、航空母艦一隻。私は口が一寸利けなかつた。黙つてゐる私に獨逸人は更に付け加へていつた。此處を何れ近い中に英國は東洋空軍の根據地にする考へでせうと。私は今自分のゐるこの海は英國の海だと氣が付いた。私は甲板の上で拳を固めて英國の勢力を打つまねをした。

獨逸人はやつと會心の笑みを見せて聲高く笑つた。私も愉快さうに笑つた。かうして私達の船は香港を出帆した。熱帶に入つた。右舷から有名な海賊島を見た。三日間の航海でシンガポールに着いた。がやうやく航海に慣れ、船中にも馴染んだ私はさまでこの航海を長く感じなかつた。シンガポールでも私は英國の軍港を眺めた。それは今まだ不完全ではあるが、完備に向かつて邁進しつつあるのだと例の獨逸人が教へて呉れた。シンガポールを出帆し、マラッカ海峡諸島の間を抜けてビナンに寄り、スマトラ富士を右に見て船は滑らかな紺青の洋上を西へ走ると黒い印度洋の大波のうねりのなかに突き入つた。船中病死した老英國人の死骸を捨てた私達の船はセイロン島のコロンボ港に着く。東洋一の大防波堤がある。

軍艦が數隻淀泊してゐる。此處でも例の獨逸人は憤慨を洩らしてゐたが、いつの間にか下船してしまつた。コロンボ港を離れて西印度洋へと船は航行を續けた。この航行で始めに見せ付けられた大英帝國の廣汎な制海權に向かつて私の稚純な感情が緊張したのであつた。私は同船の日本の海軍將校から借りた雙眼鏡を首に掛け、西印度洋上の船中で勇ましく靴音を立てゝ上甲板を歩き廻つた。

誰か男の船客が笑つていつた。「勇敢な女士官に見えますよ」と。

時折り島影が見えると私は雙眼鏡を眼に當て、ちつと上手に隠閉された砲壘を偵察するのであつた。今にして想へば足掛け四年間の歐米旅行中、海上で過した時間を合算すると約半歳になる。

眺望は時々刻々に變つた。彼の海もこの海も私には忘れられぬ懐かしい印象を與へた。が其等の海は今の實感からいふと何んだか狭い限られたものゝやうな氣がする。日本の直ぐ隣りに支那や米國が、その隣りにイタリーやフランス、イギリスが在るやうだ。そして海も陸地と同じである事を知つた洋上に、僅かに頭を出す孤島が重大な要塞地帯であつたり、恐ろしき軍備の根據地であるのを度々見た。之等の島や港を中心にして大洋は今や至る所區劃整理されてゐる。私は今も尙海は渺茫として涯しないといふ言葉を信じてゐる。がその廣大な海は、何處か他の世界に在るやうな氣がしてならぬ。火星の海か、月の海か。或ひは地球上の海でも、それは昔の海ではなからうか。

兎も角今の世の海洋は、私には狭苦しい感じがしてならぬ。

洋上元旦の思ひ出

昭和五年の正月を印度洋上に迎へた時は、私がシンガポールで得たらしい風土病から癒えたばかりの時でした。船内はしんと靜り乍ら何となくさざめくけはひが感じられます。四十度近い熱のひいたあとの感じ安い體内は、耳も皮膚もいくらか常より鋭敏になつてゐました。

初日を拜まふといふのに、縞の紋付を着ました。それでもあまり氣恥かしいやうでしたので、帯だけはさ

すがに冬の厚い帯をしめました。久しぶりで床から起きてデッキに出ましたので、海の潮風が面をさすやうに沁み渡りました。

「おめでとう。」

「おめでとう。」

といひ乍ら誰も汗ばんでゐるのです。

「寫眞を撮りませう、勢揃ひして。」

カメラを持つてゐる人達も眞白なカラに取替へてゐます。妻に別れて洋行する中年の紳士などの、そんな心づかひに身づくろいしたのがあはれに思はれました。

日本の國學を研究しつゝ二十年間に幾度か日本に往復するといふ西洋人の、何とかいふ老人が却つて洋服を着る日本人のなかで黒紋付の羽織の紋の艶を光らしてゐました。

日本國旗を刷つたカードが朝飯の食卓に並び卓上には雑煮の餅が切隅を正しくして碗の中に納まつてゐました。數の子、黒豆、トソも銚子の折紙の蝶々も殆ど、女氣の無い船中の廚で誰がこんなに細心に心くばりをしたものかと男心の優しさといふものが感じられました。食堂のボーイ達の服も思ひなしか純白の色が冴えて見えました。餅を喰べ乍ら自分が病んでゐた船室のベットで、先日中何處か遠い處で餅つきらしい音を聞いたことを思ひ出しました。

ひる前頃、ひとりのボーイがあはたゞしく私達の方へかけつけました。

「お客様のお子様達の假裝會がありますから早く御覽になりぬらつしやい。」

このボーイは自分自身が早く見度いので息せき切つて私達にこう告げると直ぐに駈け出して行きました。私達はデッキチエアで年始狀（故國へ送る）を書いてゐました。駈け出したボーイは船尾へまがる角で見え